



sousei akita

曹 青 秋 田

秋田名「佛」 ～10教区・正法院(清水道広事務局長御自坊)の佛様～



会長・事務局長

インタビュー



「コロナ禍の影響を大きく受けた二年間でしたが、任期が終わろうとしています。振り返って、お二人から感想を教えてください。」

栗谷会長：「コロナ禍ではありましたが、その時々に応じて適切な感染対策をして、行持毎に対応できていたんじゃないかなと思います。例えば、感染者の少ない時で

あれば宗務所で開催・多い時であればホテル開催：「より安全で安心できるように行うことが出来たと思います。祈りの集いに関しましても、来ていただくことが難しいのであれば、リアルタイムで中継して時間を共有して、祈りを捧げる形にすることができました。これは山田俊哉(全曹青会長)さんのおかげだと思います。ただ、前期で計画した「子供ふれあい広場」を開催できなかったのは残念に思います。」

清水事務局長：「会長のご意見そのままかなと思ったんですけど、陰に陽にといったその陽の部分を捉えますと、臨機応変というものの、その場に合った流れ・動きというものは間違いない身に付いたかと思っています。今できることをしていこう、それはやがて間も無く終わるであろうコロナ禍を乗り越え、これから先、今培ったものは間違いない陽に転じる。残念ながら子供ふれあい広場はできませんでしたが、それでも、そこは致し方ないこと。できることはできた、それで良かったのかなと思います。」

「特色を出せたと思う行持、やり残したと思うことを教えてください。」

さい。

栗谷会長：「最初の総会の時に私が話した、できる事を考えて、何ができるか考えてやっていきたいという事に対しましては、一貫してできたと思います。先程も言いましたけれども、コロナ禍でも時期に合わせた方法で開催してきただけだと思います。あと、今期の研修に関して言うと、比較的若い方を講師に迎えました。どうしてかと言うと、年の近い方がこれだけ頑張っているんだと言うことを、若い会員の皆さんにも知っていただいて、「自分も」と少しでも思ってもらえたらいいなと思っただけです。ただそれでも、すでに第一線で活躍されている方々でしたので、良い講習になったと思います。」

特色としては、会議の時間が非常に短かった事、これはコロナ禍では良かったんじゃないかなと思います。でも、それだけ会議に向けて準備をして、話を詰めてみました。若い方が多いので私たちに意見がでなかったかもしれない(笑)

やり残しとしては先程も言いましたけれども、子供ふれあい広場を開けなかったこと。あと、一番最初の研修で、ワークショップ

を先生の方からやりたいというお話があったんですけれども、コロナ禍でご遠慮をすることになったので、来てくれた先生方の意向に添えなかつたので、そこはやり残した所かなと思います。あと、青年会は研修の場でもありますけど、仲間を作る場だとも思うので、たくさんの人と知り合う機会、懇親会も含めてもつとできたら良かったかなと思います。

清水事務局長…会長の仰る特色という意味では、会員にごく近い年の方達にお願いした。これは間違いないく新しい取り組みだと思えます。今自分があと何年か経た時に、そのステージにいるかどうか、そのある種目標・指針としての方針・選定でもあったんじゃないかなと思っております。

「会長さんは今年度で会員を引退、事務局長さんはあと一年、最後の大役でしたが、時代の変化、自分たちが入ってきた時と今、こういうことで変わったと思うことがあります。ましたら教えてください。」

栗谷会長…私は活動に参加して十五年くらいだと思うんですけども、情報技術・ICTという、そこ

がやっぱり変わったなと思います。入った頃は、青年会でホームページがあるというだけで他県の青年会からはすごいと言われていたんですけども、今はもうそれが当たり前で、さらにツイッターだったりインスタだったりフェイスブック、私たちが言うところユーチューブも。そうやって常に発信していかなければいけないし、またそれだけ見てくれる人も沢山いるんだと言うのもあります。その情報技術の違いはすごくあるなと思います。

清水事務局長…会長の仰るその情報に関しては、携帯電話を開けば情報が入る時代になってきた。会も、会員もいつの間にかそのような形になって、情報収集はモニターから。私が初めて参加してから十八年くらいになるんですね。その頃は、見て学ぶと言うことがまだ残ってました。今は自身でモニターで学ぶ。ただ、そこではなく、せっかくの青年会です。で、先輩後輩隔てなく横のつながりをもっと広くなれば、ネットでは得ることのできない沢山の情報がまだまだ溢れていると思います。是非是非、特に若い青年会員の方々、これからも参加して

くださればご自身の為に、成長につながると思います。仲間作りの為にもお勧めします。

栗谷会長…そういうえば、代議員会執行部会をLINEでやったのも…情報技術にも通じますけど。

清水事務局長…SDGsを謳ってきたのもあって、会議に関しては紙や封筒の経費削減になったんじゃないでしょうか。

「全部シェアして自分のところに来て。必要な人は印刷すれば良いことだし、特にこの二三年で劇的に変わったと思います。」

栗谷会長…十年前では考えられないことですね。

清水事務局長…会員数が明らかに減っているのも一つの要因だと思えますけど、LINE上だけでも十二分に把握できるようになってきた、執行部と代議員に関しては、固定された人数に関しては、これから先も連絡ツールとして利用できるのかなど。

「最後の質問です。次期執行部に

伝えたいこと、メッセージがございましたらお願いします。

栗谷会長…もつと若い会員の方に参加してもらいたいと思ってるので、そういう方達が来たいと思えるような研修をやつていってほしいなと思います。

清水事務局長…積極的に役を担ってほしい。間違はなく自身の幅が広がります。経験は買つてできるものではないですので、むしろチャンスと思つて参画していただきたいと思います。

「お忙しい中ありがとうございます。この二年間大変お疲れ様でした。」

(聞き手…佐々木耕志)



随聞会に参加して

去る十一月十四日、令和四年度随聞会が開催された。

「思いを繋いだ瑩山禅師へ相承」と題し、岩手県の特派布教師である海野義範老師を請じた今会には、総勢二十名の参加者が集まった。

在家から仏門に入られた老師は、副貫首盛田正孝老師に参学し、大本山永平寺や正法寺の臨時講師まで務められる方である。その口から語られた瑩山禅師や、その歴史を取り巻く物語は、宗門の祖師のリアリテイを深めるものであった。

改めて感じたのは、「物語る」ということの重要さであったように思う。

道元禅師から瑩山禅師に至り、永光寺や總持寺へ続く関係性は、普段であれば血脈の中や歴史的事実として語られるのみであって、そこにどのような感応や思

い、思想があったのかを慮る機会を、どうしても失いがちである。老師にご説明頂いた「瑩山禅師は決して道元禅師の教えを離れてはいない」というそのことを語る伝光録の言葉、特にその法嗣である峨山禅師が承陽塔に銘された「若し真跡をして荒蕪の地に著かしむるは、永平の児孫にあらず。菩薩子勉めよ」の一文は、宗門の人間であれば心底に響く言葉であると思えた。

私事ながら、今夏に總持寺祖院と永光寺を拝登させていただいたばかりであった。特に、永光寺はその名は知っていても、恥ずかしながら詳細を知らずにいた。だが、その威厳ある佇まいに只々感動し、五老峯まで拝させていたのだ。そこで聞いた、「大悲咒真読の意味」。此の度、海野老師の口からも同じ物語が語られた。

それが真実かどうかは実のところ問題では無い、という老師の

言葉は「物語のリアリテイ」というものを考える重要なものであったと思う。祖師方が、いかにその道を歩んでいたか、どう法を守ろうとされたか、何を伝えようとされていたか。それを語ろうとしたとき、ただ名を呼ぶのでは無く、その物語に向き合うこと。そうすることで、法孫である自分たちがどう道を歩んでいくのかを見いだす力として生き返ってくる。海野老師の言う相承とは、そのことではないかと感じた。

最後に老師は、自坊にて瑩山禅師の「師檀和合」の言葉の下、自身のお子様や友人の縁をきっかけとし、広く手を携えて多くの行事を開催されていることをご説明下さった。実際に祖師のリアリテイを形とされた行動をされていらつしやることは、一宗侶として誠に素晴らしい姿と思えた。そして、自分は何をしていくのかを改めて問う契機を与えて頂いたことに深く感謝を申し上げる次第である。

(土屋 泰順)



正法会研修

十五教区 龍泉寺住職

岡部顕雄

去る十一月四日、五教区東山寺様を会場に、令和四年正法会（五教区、十五教区僧侶有志の会）研修を開催いたしました。研修テーマは「遺偈」、講師は七教区福城寺副住職・佐々木耕志師、参加者は二十名でした。永平寺月刊誌「傘松」に詩作がいくつも掲載されている佐々木師ですが、予備知識の無い初心者で遺偈を作成するには？という主催側の要望に応え、内容を絞って押さえるべき点は繰り返し説明するという、参加者側にとって非常に理解しやすい講義でした。遺偈とは遺誡偈頌の略であること、四言古詩が多いこと、漢詩は「平仄（ひょうそく）」（音律上の調和を目的とした、句中における平字と仄字の排列の規定）に従って作成することなど、恥ずかしながら殆ど初めて知ることばかりでした。また、法語は全て書き下し文で詠むので、詩偈における音律の調和などは今まで気に留めたこともありませんでした。佐々木師は、漢詩を実際に中国語で詠んだり日本語ラップの韻を踏む箇所を歌ってみ

せたりと、漢詩における音の重要性をわかりやすく楽しく解説してくださいました。しかし講義後半、如浄禅師、道元禅師、宮崎実保禅師の遺偈、佐々木師が自身の遺偈を解説したあたりから、遺偈とは限られた文字と制約の中で自己の在り方を表現すること、それは作成した僧侶の力量が如実に表現されてしまうこと、そういった怖さがあることを今更ながら気づかされました。

講義時間を短く設定してしまい、当初予定していた参加者の遺偈作成に至らなかったことが、主催側の反省点となりました。わかりやすく楽しい講義をしていただいた佐々木師に感謝するとともに、秋曹青の研修でも講義する機会を一度設けていただいたら、会員の皆様の詩偈への理解もより一層深まるのではと感じました。



住職学研修

二月二十二日、宗務所・禅センターにおいて、住職学研修が行われた。今回は九教区宝昌寺御住職・新川泰道師をお迎えし、「今、あらためて3・11をふりかえる」災害ボランティアのいままでとこれから」と題して御講演頂いた。開講調経に続いて、楞嚴咒をお唱えして東日本大震災物故者十三回忌を厳修し、全員で消災咒を写経してから拝聴した。

新川師は、医療・福祉関係者や僧侶らが集まる『ビハール秋田』の代表を務め、災害ボランティア（以下、ボラと略称）のスペシャリストとして知られる。初めてボラを務めたのは平成七（一九九五）年の阪神・淡路大震災であった。何度か神戸に通ううち、長田区の卵屋の店主から、火災で焼け焦げた硬貨を託されたという。「忘れずに伝えていってくれ」というメッセージだった。その後、全曹青ボラ委員長も務め、続発する自然災害の復興を支援してきた。師は曹洞宗ボラのパイオニアともいえるべき有馬実成老師（一九三六―二〇〇〇）から大きな影響を受け、この方と出

会ってなければボラをやつていない」と語った。大菅俊幸「泥の菩薩」――NGOに生きた仏教者、有馬実成（大法輪閣）を紹介されていたので、是非お読み頂きたい。



つい最近のように感じていた東日本大震災から、早や十二年が過ぎた。師は我々に「あの日・あの瞬間、あなたはどこで何をしていたか？」と問いかけた。師は宗務所で寺院実務研修を受けていたが中止となり、道路も停電で混乱する中、なんとか御自坊に戻られた。次第に被害が判明する中、支援物資やトラックを手配し、三月二十三日から岩手県陸前高田市・釜石市・大槌町を訪れてボラに取り組んだ。その際、鶴の湯温泉の源泉を汲み出して足湯サービスを実施し、大変喜ばれたという。また、少人数でも容易で継続的に実施できる「行茶活動」が定着した。燻りガッコ・山吹まんじゅう等をお茶

請けに用意すると大変好評で、会話が弾みきっかけになったという。我々はつい《僧侶として》何が出来るか考えてしまうが、まずは相手の事を思い遣って寄り添い、沈黙を無理に破ろうとしないのが大事」との事だった。

東日本大震災では死者があまりに多い為、火葬が追いつかず、仮埋葬問題が発生した。自衛隊が大きな穴を掘り、多くの御遺体を埋め、土を被せるのである。宮城ではやむなく受け入れたが、釜石市では全員を火葬する事に強くこだわった。戦時中、艦砲射撃で七百名以上が犠牲になった際も全員火葬したという土地柄である。また、吉里吉里町の遺体安置所では、ブルーシートからはみ出ている体の一部と皮膚の色に衝撃を受けたという。変わり果てた家族と対面する人々、まだ行方不明者を探す人も多い中では、読経を頼まれても朗々とお唱えできる雰囲気ではなかった——師は言葉を詰まらせながらも我々に伝えてくれた。

わってきた師へ「原動力は？」と質問が挙がった。答えは「師一流のユーモアで」腐れ縁です。いろんな所でいろんな人と一緒に活動して繋がりが出来る。あいつがあんなに頑張ってるのに、俺がやらないうけにはいかな。それが大きかった。『諸行無常』とは滅びるだけではない。今がどんなにひどい状態でも、必ず回復・復興していく。それだって諸行無常」という言葉に、師の矜持を感じた。

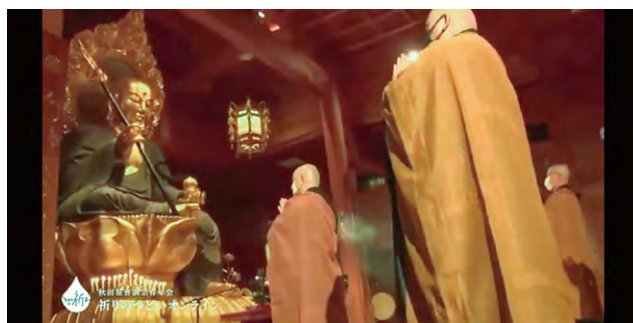
(佐々木耕志)



第2回 オンライン祈りの集い

去る九月二十一日、正法院さんにて行われました第二回オンライン祈りの集いに参加してきました。茶話会には過去に参加しましたが、オンラインは初参加で、正法院さんに行ったのも初めてでした。今回は本堂ではなく地藏堂で法要を行ったのですが、久しぶりに大きな地藏菩薩像を見ました。以前に手伝わせていただいたお寺にもありましたので、懐かしく感じました。私は差定を聞いていましたが、習儀に参加できなくてぶっつけ本番で臨みました。到着した時には最終カメラリハーサルも始まっていた。先に書いた通りオンラインは初めてでしたので、気にしないように心掛けても本当にカメラが気になって仕方ありませんでした。そして読経が進んでいき、今回は地藏菩薩の前でもあり「地藏歎偈」を唱えました。この地藏歎偈も久しぶりで、かつて「節が違う」と怒られたのを思い出しました。終始緊張しながらでしたが、随喜の皆さんと編集係の方々のおかげで滞りなく進んだと自分では思っています。最後にこの法要を見てくださった皆さんの祈りが、それぞれの大切な方々に届いてくれたらありがたいです。

(十七教区 向川寺副住職・櫻田 元伸)



映画紹介

『クンドウン』(一九九七)

マーティン・スコセッシ監督



「沈黙」などで知られるマーティン・スコセッシ監督の隠れた傑作と呼ばれる映画で、タイトルは「尊い存在」を意味する。

これはダライ・ラマの敬称としてチベットで使われている言葉で、その名の通り現ダライラマ十四世を描いた作品である。

作中では、子供の頃に観世音菩薩の転生として認められ、多くの僧侶の中で学び育ち、やがて指導者として成長するも、中国の侵略から国と法を守るため、苦しみとともにチベットを離れるまでが語られている。

登場人物はほとんど現地の人間が演じており、俳優はほんのわずかしが登場しない。そのためかチベットの広大な山岳風景と相まって、非常にみずみずしい映像が映し出される。子供ながらの奔放さを見せながら、少しずつ教養と責任、そして仏智を身につけていくダライラマ。だがやがて、中国の手がチベットへ伸びる。仏の教えの下、戦火や侵略に対し自分たちはどうするのかという究極のリアルが、そこでは本人の苦悶の中で映し出される。そしてそれを演じる現地の青年の姿に、見る人は間違いなくダライラマの若き日を見るだろう。

その様子は決して他人事ではなく、封切から四半世紀が経ち、未だ戦火くすぶる世界情勢である。その中に、仏教徒としてどう立つのか。この映画を見たとき、心臓を掴まれるような気分を味わった。政治や世論ではなく、信

心ある者としての考えを持つこと。この映画を通してそれを思わされた気がする。

作中でダライラマがインドへ亡命する際、あなたは何者かと聞かれて答えた言葉がある。

「私はただの男だ、仏に仕えるただ一人の僧だ。私は月の影、水面に映る月の影である。私は善を行い、自己に目覚める努力をしている者だ」

この作品の映像は、美しくも残酷である。

しかし、それ以上に私たちへ言葉と姿でもって平和と仏教徒の素晴らしさを伝えてくれる作品であると思う。

作品の性質上、今は配信では視聴できないが、レンタルなどでぜひ一度ご覧いただきたい。

特に、チベット仏教特有の砂で曼荼羅を作り、それを壊す光景は見ているだけで心に訴えるものがある。

他人の感想からで恐縮だが、それにはこんな意味があるそう

だ。
「砂は夢のように一瞬で崩れ、戻らない。が、それを為した時間は無くならない」

(土屋 泰順)

書評

森三樹三郎・著

『梁の武帝 仏教王朝の悲劇』



宗門人ならば、中国の歴史に全く興味がなくとも必ず知っている皇帝——それが梁の武帝(四六四〜五四九)である。本則「達磨郭然」において、自分がいかに佛教を信仰し、寺院僧侶を保護してきたかを誇示して、それを達磨大師に全否定さ

れる逸話はあまりにも有名である。ではその武帝について、我々ほどのくらい知っているだろうか。本書は中国思想研究の大家・森三樹三郎(もり・みきさぶろう、一九〇九〜一九八六)が、武帝の生きた時代背景や生涯、歴史上の意義などを深

く掘り下げたものである。六十五年以上も前に出版され、長らく入手困難だったが、一昨年の秋に初めて文庫化された。あとがきで森は「梁の武帝は、私の最も好きな人物の一人である」と述べており、この思いが執筆の動機となったのだろう。

さて本書の内容だが、中国史における魏晋南北朝時代の中でも、武帝の生きた六朝時代(二二二〜五八九)が詳しく描かれる。我々にとってはなじみの薄い時代であり、初めて聞く固有名詞が延々と登場するため、読み進めるのは非常に根気が要る。ここでは本書の後半を占める、佛教との関わり・王朝の滅亡について述べたい。

まず「達磨郭然」については、達磨大師の実像がほぼ不明であり、多くの渡来僧の複合的人間像が今に伝わる逸話とみられる事から、はつきりいえば架空の話である。この背景を森はこう分析する。

：後世より武帝の佛教信仰の真实性を疑う者が少なくないのであつて、その盛大な造寺造塔の事業：は：儀礼尊重の風の表れに過ぎぬといった見方が有力であ

る。(達磨大師との)伝説なども、武帝に対する不信用から生まれたものであろう。

要は「武帝の信仰は上辺だけだ」と思われていたのである。森はこの通説を否定するため、武帝の著作や信仰の実例を詳細に論じていく。中でも生涯四度の「捨身」は圧巻で、莫大な財産を寺院に寄付し、帝位を返上して自ら「寺男」のような務めまで行なった。その度に臣下は同じだけの金銭を寺院に納め、武帝とその王位を買い戻したという。こうして国家財政は逼迫し、反乱を誘発して武帝を破滅に追い込んだ。八十六歳にして幽閉され、餓死のような有様だったという。

紙面の都合で詳しくは紹介できないが、森は武帝の例から佛教と儒教を比較し、「佛教の根本的立場そのものが、社会的無関心のうえに位置づけられているのではないか」と述べる。通俗的に過ぎ、我々には肯定し難い見解だが、考えさせられる反対意見として、ぜひ読んで頂きたい部分である。興味を持たれた方は一読をお勧めしたい。

(佐々木耕志)

曹青秋田／第93号

発行／秋田県曹洞宗青年会

事務局／北秋田市鎌沢字家ノ南45 正法院内

発行責任者／栗谷 大三

編集責任者／佐々木耕志

秋曹青ホームページ <http://www.sousei-akita.net/>